

まつど未来づくり会議 会議録（要旨）

分科会名：地域連携分科会（第2回）

開催日時：平成21年8月31日（月）17時～20時

開催場所：教育委員会5階会議室

出席委員：小野瀬雄次、小山田美和子、金子雄二（分科会長）、喜久村徳雄、
桑田雅子、小寺邦明、後藤敦子、島尻武雄、松川正、丸山孝子、
藪田京子（分科会副会長）、鈴木正則、橋本守（敬称略、順不同）

事務局：白井宏之（政策調整課）、田中千智（政策調整課）

【会議内容】

■ 分科会長挨拶

- ・ もっと時間があれば、データの強みと弱みの延長線上に、前期基本計画の第3次実施計画、平成20年度から22年度の施策についてお話したかったが、時間がないので早めに終わらせることを考えながらやっていこうと思う。議事進行の方は事務局がやってくれるということなので、話し合いのルールに従って、私は自由に議論をしたいと思う。どうぞ宜しくお願いいたします。

■ 事務局説明（本日のねらい・進め方の確認）

- ・ 本日のねらい：「テーマ・政策に関する理解・探求促進」
- ・ 進め方：結論を出すのではなく、話し合いを通じて探求・理解を深めることを目的とし、第2回で話し合われた内容をもとに第3回以降で成果物を生み出していく。
- ・ 話し合いのルール
 - ⇒全ての意見に価値を置く
 - ⇒人の話をよく聴く
 - ⇒想いや考えは全体で共有する
 - ⇒時間厳守
 - ⇒未来に焦点をあてる

■ チェックイン：「今の正直な気持ち」や「気になっていること」などの想いを共有

■ 分科会へのメッセージ・エール・依頼文の確認

■ 第1回分科会で話し合った内容の確認

■ データ集を読んだの気づき・感想の共有

- ・ データ集の強みの中で、協働を挙げているが、まだまだ情報の共有が不十分であり、強みというより弱みではないかと思う。
- ・ 女性センターの男女協働参画をもっと進めるべき。
- ・ 職員は、先入観を持たずに人と接してもらいたい。
- ・ 松戸市のNPOの活動について日常的に関わる機会が少ないように思う。
- ・ 町会や自治会の加入率が落ちてきている。組織の維持が難しくなっているのかなと思う。
- ・ バリアフリーが求められているが、財政難に相反するものがある。
- ・ 男女共同参画という面で、女性たちの意欲だけではなく、社会から求められていると思う。
- ・ 日本の男女共同参画が勧告されるという記事を見た。松戸の女性管理職は県内では割合が低い。
- ・ 松戸市は人権宣言をしていることがすばらしい。
- ・ まちづくりに関して、すべての人々に基本的な考えが浸透していくにはどうしたらいいのかなと思う。
- ・ 協働のことを考えると、若い人たちは町会やまちづくりがわからないので浸透させるにはどうしたらよいか。市の働きかけやNPOからの情報が自分から求めないと得にくい。
- ・ 男女共同参画については、子どもを生んでから女性が再び働けるような環境も必要だが、両親ができるだけ長く一緒にいられるような環境をつくることも大切なのかなと思う。
- ・ 政策1の、協働の基盤について。地域の活動がばらばらなので総合的な拠点がない。縦割りではなくて統合できる拠点があればよいのでは。地域協議会などができているところもあるので、松戸にもそのような場所が必要なのではないかと思う。
- ・ バリアフリー化は必要かとは思いますが、Aという障害を持った人への配慮はBという障害を持った人にとっては障害になることもあるので、みんなに対応できるようなものでなければならない。
- ・ サロンというか居場所について考えているのだが、高齢者はどのようにしたら出てきてくれるかを考えてもなかなかでてきてくれない。自分たちで居場所を選べるくらいどんどん居場所を作っていくことも必要なのでは。
- ・ NPOや市民活動をなかなか知らないということだが、場所的な問題もあって、一生懸命やっているが情報が伝わらない。
- ・ 強みと弱みをどう共有するかどうか自信がない。ほとんどの強みのところはなにを根拠にしているのか。担税力は確かに弱みだと思う。

- ・ 市民課の窓口では、300円でも「ありがとうございます」と言って渡すべきなのに、いまだに偉そう。職員が一般企業に勤めて勉強すべき。
- ・ 地域格差は考える必要がある。キャラバン隊などを作って応援させるとか。小中学校でボランティアを教えないと、なかなかできるものではないので、教育から始めるなどの仕組みを作ってやるといいと思う。
- ・ 場所がないというのではなく、役所の建物も大いに利用すべき。まちおこしをするために、みんながもっとお金を使うべき。
- ・ 地域活動への参加割合は目標にほぼ達成しているが、実態は地域に参加している人は少ないのではないか。その参加頻度が少ないのではないかを思う。
- ・ NPO法人の設立は目標値に達成しそうだが、実際に活発に活動しているのか、そのような情報を市民が得られていない。実際はお金が足りずに活発に活動できていないなどあるかもしれない。
- ・ 情報を持っている人と持っていない人の格差が激しい。情報の収集の仕方を知らないし、情報の重要さも知らないので、それを教えるにはどうしたらよいか。
- ・ 2007年問題。NPOが、団塊の世代の受け皿としてがんばろうとしているが、実際やりきれしていない。
- ・ どうして松戸を自慢できないのか。誰でもいいので、松戸の自慢をできるようになることが活性化につながるのかなと思う。
- ・ 松戸は情報を全国に発信するのが苦手。他市が「こういうことをやりました」というとそれで有名になったりするが、実は松戸のほうが先に始めていたことだったりする。
- ・ 新しい人権問題にもっと注目すべき。(HIV、ホームレス、性同一障害)

■ 対話セッション

- ・ データ集の特筆すべき強みと弱みの根拠はどのようなものだと思うか？松戸の強みというのは何なのか話し合いたい。前期基本計画の協働から次のように進むか。
- ・ 支所や市民センターを利用できるのは強みだが、実際の支所の活動はもっとできるのではないか。
- ・ 市民センターは催し物が一番多いが、市民との対話をもっと増やしたほうが良い。
- ・ 市民センターは他市よりも多いと思う。他市へ行くとそのような場所がない。
- ・ 支所と市民センターは違うと思う。市民センターのできた経緯は、公民館の少なさにある。市民が交流するために、公民館をふやしていくより市民センターをふやした。

- ・ 市民センターは基本的に貸し部屋。催し物という分類は、サークル的なものが多いのではないかと思う。社会教育団体は500くらいあるが、その方々が使うことが多い。
- ・ 行政が市民に何かを説明したりするために市民センターを使うこともあるともあるが、催し物と比べると少ない。
- ・ 市民センターは、使いやすい時間がいつもいっぱい抽選になってしまう。
- ・ まちづくり条例があるのが一番の強みかなと思う。
- ・ 皆さんが見物に来るような街にできれば。
- ・ サポートセンターでは、実際にNPOを立ち上げる際の相談に乗ったり、学生ボランティアなど、イベントを行うための相談、人材育成などの相談に応じている。
- ・ 人材育成機能を持ってほしい。
- ・ 施設が駅から遠いこともあり、なかなか市民に知ってもらえない。
- ・ サポートセンターは民営化しているので、市の事業としてサポートセンターの運営管理をNPOが行っている。
- ・ 今のサポートセンターは機能しているが不便。サテライト事業として、週に1回くらい市民活動活性化のために派遣するなどしたほうがいいのか。
- ・ 行政が縦割りになっているからいけない。
- ・ 協働というからには行政と市民が対等にするということだから、行政が低く、市民が高くならなくてはならない。強いNPOをつくらなければ。
- ・ 公民館が1つしかないが、いろいろな場でその役割をしている。そのよさを利用して、市民が何かを提供する。市民センターを利用して、横串を通すようないろいろな機能を持たせるとかしたらよいのではないか。
- ・ 市民センターは民間委託されているので、そのようなことを管理者に求めるのは無理。センターに社会福祉協議会があることもあるが、それは、場所がそこにあるだけ。
- ・ 場所の問題ではなく、それは人材の問題なのではないか。
- ・ いろいろな機能が分散しているので、一箇所にまとめたい。市民センターの窓口で聞くと、社会福祉協議会に聞いてくださいと言われてたりする。
- ・ 矢切にはサポートセンターのとなりに社会福祉協議会があるが、どうして連携しながらできないのかなと思っていたが、顔を合わせて話せる場づくりが進んでいない。
- ・ 地区社会福祉協議会というのは、評議員と民生委員が関わっている。スタッフが地区社協に集結しているので、これからの松戸をしょって行くのは地区社協である。15地区あるが、民生委員はそのエリアの学校の校長や教頭先生が参加している。

- ・ 社協そのものが高齢化している。社協が及ばないものについては補えるようにしていかないといけない。我孫子は特殊で、それらが一緒になっている。そのような形になれば、壁が崩される。
 - ・ 市政協力委員の横の連携だが、松戸の基本は 12 地区に区切っている。それぞれに地区長がいる。地区長会議もある。地区長が合同で動いていて、連携がとれている。行政と対等になっている。
 - ・ 市政協力委員は町会長がやっている。防犯灯は町会費から出ている。それらを認識してもらいたい。商売をやっている人がみんなやらされる。そういう人が犠牲になっている。
 - ・ そういうのも最近は変わってきている。いろんな人がやっている。
-
- 対話での探求を踏まえて、共有された課題意識・想い・具体的な期待の中から、特に重要だと思うものについてシールで投票した。
 - 項目の中で市民として貢献できることや課題に下線をひいた。
 - 以上の内容を整理したものが別紙。
-
- 話し合いの感想を共有

 - 次回の説明
ここまでの探求を踏まえて、私たちは何を実現したいのか政策テーマごとに検討し、「目指したい姿の宣言文」を作成。

以上

| 政策 | 想い・課題意識 | 具体的な期待 |
|--------------------------------|--|--|
| <p>01 市民と行政の協働を推進する</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・市民が活動しやすいシステムになっているかどうか(2票) ・市民のレベル向上とNPO・行政の横の連携をとる(4票) ・松戸ブランドの創設(6票) ・行政の横の連携をとる(3票) ・松戸の財産は人でありたい(6票) ・協働が言葉だけでなく、具体的な行動ができるシステムはないか(1票) ・協働マップがある(システムがわかりやすいように)(1票) ・協働するための人材センターがある(2票) ・市民と行政が対等な関係を作る(2票) ●市民が参画するには不便が多い(場所知らない) ●協働するための目的・目標があると参加しやすい(松戸ブランド) ●地域コミュニティの弱体化→町会、自治会 ●まちづくり意識が(子どもから大人の)全ての人に浸透していくようにするにはどうしたらよいか ●NPOや活動団体のサポートセンターの存在をどうしたら多くの市民の人に知らせられるか(2票) ●若い人達をどのように町会やまちづくり活動に参画させられるか、今後の松戸市に発展に対するポイントである(2票) ●街おこしに全国渡し舟サミット(矢切の渡し)は全国的に有名。(4票) ●行政がやること、市民がやること、協働でやることの判定基準を誰が判定するのか(1票) ●サテライトオフィスモデル事業(8票) ●協働のまちづくり拠点の整備は具体的になっている?(5票) ●町会・自治会の加入率が低下している→地域コミュニティを維持することが難しい ●高齢者が町に出る機会を増やすことを考える会や、人の中で出てくるのは「町会との連携が必要」ということだが、現実にはなかなか進まない(1票) | <ul style="list-style-type: none"> ・行政と市民が協働することにより、より多くの政策など、人々に広げることができる(環境、教育、社会生活等)(1票) ・笑顔のあふれるまち(1票) ・地域の問題を考える組織づくり(1票) ・協働といっているが、そのことをもっと知らせる必要がある(3票) ・ふるさとづくりのための協働にどんなものがあるか、すぐにわかるようになっている ・多くの人が地域活性事業のに参画する ・協働するための能力がいつでも生かされるシステムができている ●(強みの中で)協働のまちづくりの環境(条例、基本計画)はできた。問題は、これをどう共有化できるか?(1票) ●NPO法人の活動はあまり知られていない?(7票) ●政策1で、町会の活動のあり方。特に高齢者に対して。 ●NPOの設立数は、目標に近い(90%)が、NPO活動の理解が進んでいない ●様々なことに対して先入観を持たない人材を育ててほしい(市職員の方に対しての希望) ●問題を抱える人の場合(例えば介護など)近くの集まりには出て行きたくない、事情を知られたくないという声がある。選べる居場所がたくさんあるのが理想。 ●市政協力委員がどのように選ばれ、どんな仕事をしているのかが少しわかった。市に利用されるだけでなく独自の視点で活動してほしい。 ●新たに生まれた課題「松戸自慢」をまちづくり、まちおこしの原点にしたい。(4票) ●市の活動、働きかけやNPO等の情報がなかなか得る機会がなく、求めなければ得られない情報。これをいかにPRしていくか考える必要がある。 ●政策1について、町会活動と、他の活動(福祉活動など)の連携を図る意味で総合的な拠点となる施設や組織がない。例・地域協議会のようなもの(3票) ●データ内容の量が質への転換を図る(1票) |

02 一人ひとりの 人権が尊重され、 参画しやすい地 域社会をつくる

- ・1人1人が、自分を地域に生かす方法を考える(1票)
- ・地域の人材を生かす手立てがもっとあれば(2票)
- ・問題を抱える人が気楽に相談できる場所が少ない(1票)
- ・女性が差別されことなく働ける職場づくりができること(2票)
- ・子育てのサポートを行政と市民が協力してできるように(1票)
- ・支所の地域での役割を再認識する必要(3票)
- ・相互理解、気楽に相談する場がある
- ・地域で困っている人を自然と助けるシステムがあれば
- ・バリアフリー化が進んでいない(6票)
- ・人の関係、まちづくり
- ・ユニバーサルなまちづくり(3票)
- ・すべての人々が参加しやすい地域活動(5票)
- ・まちづくり条例の理解と協働事業の増加
- ・まちづくり条例が有効に働き、自立した市民と行政が対等に協働する(4票)
- ・高齢化等の問題⇒逆に、健康な高齢者の活用とネットワーク化を図ることにより新たなパ
ワーが生まれるか(1票)
- ・人と人が理解し合い、つながりを持てるにはどうすれば良いのか(1票)
- 女性の登用状況について、松戸市は審議会・市の女性管理職の割合が少ない。(6票)
- 人権について、人権宣言をしていることはすばらしい
- 市民意識調査(人権)によると、学校の人権教育推進が44%あり、もっと増やしてもいい
か?どこまでやれるか。
- 出産後にも働ける環境も大切だが、小さい子どもには親が長い時間ついていられる社
会があつたらいい。
- 人格、人権を守り、高める手立てがどうなのか。ニーズの高まりを理解しているか。
- 高齢者虐待、児童虐待の問題
- 男女平等の実現に向けて、特に子育て中の女性の支援は?
- バリアフリー化については「誰にとっても」ということが必要。(Aにとってのバリアフリーが
Bにとっては障害になることがある)(2票)
- 意見が言える人、外に出てこられる人の要望が表面化するが、中にこもっている人たち
の意見をどう把握するか。
- 基本的な人権の重要性は認識しているが、その具体的な表現方法があいまいである。
- 外国人が身近にいるが、接し方がわからない。(2票)
- 新しい人権問題(HIV、ホームレス、性同一性障害)(2票)
- まずは身近ですぐにできそうなことから。
- 情報を持っていない人という人との差が広がっている。

- ・目に見える人と人とのつながり
- ・ふるさととなりえるまち(5票)
- ・外国人と市民が協力し合いながら多くの文化が共生する街(2票)
- 社会が女性の力を求めている(労働力)
- 身近のところで気楽に話し合える場所とコーディネーターの必要性
- 縦割り行政の打破
- 何のために市民と行政の協働をするのかも共有しているか
- 松戸市民活動助成制度
- 市民として出来ることがあると考える意見が多い。行政を動かすエネルギーを感じる。
- 目標値が設定されているが、何%(最終的に)の達成をめざすか、低い数値で今後とも
必要と思われる項目については引き継いでも良いのでは。
- 成果を出すためには市民だけでなく行政の力によるところが大きいと感じる
- アイデアは市民から、金は行政から、実行はNPOを中心に市民と行政の橋渡し
- 何が問題なのかかわからないのが問題
- 行政は積極的に市民に入ってこない現状がわからないのではないか。
- 今後ボランティア活動やまちづくりなどが大切なのだという認識を広めることが大切。
- 市民が利用しやすい組織でないと普及しない。
- 政策1について、NPOの活動が日常的に触れる、見る機会が少ない
- 具体的に行動できることを提案しよう
- 楽しいこと(イベントやサミットなど)で、少しずつ意識を浸透させよう。難しく思えること、
実現が無理と思えること→モデル事業として少しずつやってみよう。
- 必要な情報を得やすいシステムをつくる
- 組織間の連携を図る方法を具体的に考えていく必要がある。